道普請（みちぶしん）

「いよいよ明日からだね。朝も早いし、道普請に備えて今日は早く寝るように。」

そう言う先生の笑顔を見ながら、愛は少し後悔していた。（確かに十津川村には興味はあったけど……。休みもなくなるし、体もきつそうだし……。）

「道普請」を辞書で引くと、「道路の新設や修繕の工事。道路工事。みちづくり。（日本国語大辞典）」とある。奈良県吉野郡十津川村。紀伊山地の深い山間に位置し、古来より周囲との往来が困難な地域であったため、独特の文化、気風を育んできた村である。地域のことは地域で行う習慣があり、道の整備についても、住んでいる人々が力を合わせて行い、集落と集落を結ぶ生活道を伝統的に村民による道普請によって大切に守ってきた。現在、「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコの世界遺産に登録されている「大峯奥駆道」や「熊野参詣道小辺路」は、こうして村人たちによって千年以上も守られてきたものであり、世界的にもスペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」と併せて、珍しい世界遺産の「道」なのである。

愛たち、大学のボランティアメンバーは、明日から一泊二日の日程で十津川村へ熊野参詣道小辺路の道普請に行くことになっていた。平成二十三年九月、紀伊半島は、台風に伴う大雨により大規模な土砂災害が多発し、十津川村でも多くの死者や行方不明者が出ただけでなく、家屋の流失や浸水、また避難勧告により多くの人々が避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされた。国道をはじめとする生活道路の復旧は最優先で行われたが、世界遺産に指定されている大峰奥駆道や熊野参詣道小辺路にも豪雨により土砂崩れなどの被害が出ていた。これらの古道は、古より村の人々が道普請をして大切に守ってきたものであり、今回の災害のため、未だ傷んでいる箇所が多く残されていた。

「ええ、まだ登るの……。」

昨日に十津川村に到着し、旧五百瀬小学校で一泊した愛たち一行は、道普請の予定の場所を目指して山道を登り始めたのだった。はじめこそ元気一杯だったが、これほど険しく急な山道が続くとは全く予想外だった。ただでさえ狭くきつい傾斜であることに加え、台風の影響で落ち葉や枝が散乱していて、歩きにくいことこの上ない。一時間も山道と格闘した愛は、もうへとへとで足が上がらなくなってきた。

「何でこんなことに参加したのかしら……。」

そもそも出発前から迷っていたのだ。

「こんにちは。ごくろうさまです。」

先生の声が聞こえた。見ると、道普請の作業をしている村のおばあさんがいる。おばあさんは、ほうきやトンガ（「くわ」の一種）などを持っている愛たち一行を見ると、にっこり笑って頭を下げてくださった。そんなおばあさんを見て、愛は昨夜、旧五百瀬小学校で話を聞かせてくださった村のおじさんのことを思い出した。

「わたしたちはこの村が大好きなんだ。昔から受け継がれてきたこの自然や集落、暮らし、そんなもの全部が大好きで、ずっと大切にしていきたいんだよ。そのために、村の人たち同士のつながり、子どもたちや先生たちとのつながり、そしてみなさんのような村の外の人たちとのつながりを広げたり深めたりしたいと思っているんだ。だから、そんな機会づくりをしているんだよ。」

昨夜、宿泊した旧五百瀬小学校で、愛たちは、十津川村神納川地区で農家民泊の紹介や廃校利用、ふれあい広場の運営などをされているおじさんから話を聞いていた。おじさんたちは、県内の小学生を村の民家に受け入れて、様々な自然体験や村の人たちとの交流ができるようにしているそうで、子どもたちの生き生きとした姿を熱っぽく語ってくださった。教員を志望している愛には、そんなおじさんがとてもまぶしかった。

「そろそろ目的地だ。」
　昨日のことを思い出しながら歩いていた愛は、先生の声でふと我に返った。そういえば道は一層急になり、落ち葉や枝だけでなく石もごろごろ転がっていて、とても道と呼べる状態ではなくなってきている。あんなにしんどかったのによくここまで登ってこられたものだ。昨日のおじさんからパワーをもらったのかも。そう思って愛はクスッと笑った。

　予定の場所に着いた。道幅は一メートルもなく、その上に大きな石や木の枝が散乱している。また、所々に水が流れ、道が寸断されている。
「さあ、道普請を始めよう。」
　力のある学生たちは協力して大きな石を動かし、愛たちは木の葉や枝を拾い集める。台風の大雨のためにできた水の流れをみんなで整備し、歩けるようにする。普段したことのない作業に愛たちは黙々と取り組んだ。作業はなかなかはかどらない。一時間もするとみんな汗びっしょりになった。かがんでの作業に腰が痛くなった愛は、のびをしたついでにふと後ろを振り返った。
「……すごい。道ができてる。」
　下を向いて作業しているときには気付かなかった。しかし、確かに自分たちの後ろには道ができていた。古から受け継がれてきた参詣道がそこにあったのである。
「ああ、この道は、こうしてずっと人々の手で守られてきたんだ。」
　何百年も前の村人たちも、きっとここでこうして同じことを思っていたんだろう。そう思うと、道の向こうにたくさんの人々の笑顔が見えたような気がし

た。と同時に、ずっと続いてきた歴史の流れの中に、今、自分も確かに立っていることを愛は感じていた。

「みなさん、ごくろうさまでした。わたしたちも頑張っていますよ。ふふ、ここはわたしたちみんなの道なんですね。」

心の中でそうつぶやくと、また愛は作業を始めた。村のおじさんの笑顔やはるか昔の誰とも分からない人々の笑顔を思い描きながら―。単調な作業を、今まで以上に一つ一つていねいに―。

一泊二日の道普請だったが、愛は、ずい分多くのことを考え、学んだような気がしていた。作業を終えて山を下りる道すがら、登りには当たり前のように歩いていたこの道は、実は他の誰かが普請してくれたから歩きやすくなっていたんだと気付けた自分、登りのときに出会ったおばあさんに、帰りには自分からにっこりと笑いかけることができた自分は、これまでよりもずいぶん素敵な人になった気がする。おばあさんに思わず、

「ありがとうございます。」

と言ってしまったとき、びっくりした顔がみるみる笑顔に変わっていくおばあさんを見て、胸に温かいものがこみ上げてきた。そのとき、昨夜のおじさんの「この村が大好きなんだ」という言葉と笑顔が、再び愛の心に響いてきたのだった。同じ奈良県に、こんな素敵な村が、温かい人たちがいる―。今回の体験全てが、愛には忘れられない宝物になりそうだ。

「また来たいね。」

帰りのバスで友達がそう言った。

「うん。きっと来るよ。」

愛は心からそう言ったのだった。

○　出発前にはあまり乗り気ではなかった愛と、道普請の作業を一つ一つていねいに行う愛とを比べ、愛を変えたものは何だったと思うか。

○　「また来たい。」と愛たちが思う理由は何だろうか。

○　愛たちがつくった道は、どこへ続いていく道だと思うか。

※この資料は、奈良教育大学ユネスコクラブの協力により、実際の活動を基に作成したものです。

奈良県教育委員会
http://www.pref.nara.jp/dd_aspx_menuid-18608.htm/
（学校教育課Webページ）